

特集：座談会

高島 健治

TAKASHIMA KENJI
(千葉県浦安市立浦安中学校)

谷口 友隆

TANIGUCHI TOMOTAKA
(神奈川県相模原市立由野台中学校)

福島 美記子

FUKUSHIMA MIKIKO
(東京都板橋区立高島第三中学校)

和田 朋子

WADA TOMOKO
(工学院大学)

根岸 雅史《司会》

NEGISHI MASASHI
(東京外国語大学)

中学校における『読み』の授業とは

根岸 平成 24 年度版 NEW CROWN の構成は、旧版から大きく変わりました。その 1 つに、リーディングが「USE Read」として独立したことが挙げられます。

今回の改訂にあたり、NEW CROWN 編集委員会では「教科書本文とは何か」という議論をしました。これまで教科書本文は、教科書の中の重要な位置を占めてきました。たとえば、NEW CROWN の初版（昭和 53 年度版）は 9 割が本文です。また、本文は、文法の導入・音読・和訳・会話練習・内容理解などいろいろなことに使われてきました。さらに NEW

CROWN は題材を重視した教科書なので、人間教育の面も含めて本文がすべてを担っていたという側面があります。導入時のオーラルイントロダクションの活動などは、まさにそういった教科書本文ゆへの指導法だったと思います。しかし、オーラルイントロダクションのような指導では、自分で読まなくても内容が理解できてしまう、という実態がありました。

高校入試や現実の生活を考えると、学習者はいずれひとりで英語を読む場面に直面します。授業中に、補助がある状態で読めたような気持ちになっけていても、実際は

読めていないのかもしれないのです。そういったことから、「読む」ことに特化した活動を入れよう、ということで USE Read が導入されました。

しかし、「Read」を独立させたことで、中学校ではあまりされてこなかったであろう訳読（英文和訳）指導が増えるなど、新たに出てきた問題もあります。この座談会では、中学校におけるリーディング指導とはどのようなものなのか、また、USE Read を使ってどのように指導していったらよいかを考えていきたいと思います。

USE Read を使った授業実践の紹介

根岸 それでは、USE Read を使って実際にはどのような授業をされているのかを、まずはうかがいたいと思います。

目標別の授業展開(2年L5, 3年L6)

谷口 USE Read の授業展開は、そのときの達成目標や生徒の発達段階に合わせて変えているので、レッスンによって違います。たとえば 2 年 L5 “My Dream” の USE Read はスピーチ原稿なので、ゴー

ルはスピーチの発表にします。2 年の 3 学期にきちんとしたスピーチをさせたいので、前段階としてこの時期にしっかりとスピーチの骨子を押さえておきます。

まずは、どう理解させるか、ということからスタートします。1 時間目は、ALT や日本人教師が、登場人物になりきってスピーチ発表をします。内容は、教科書の内容をパラフレーズしたものです。

分量は特に気にしませんが、新語はなるべく使わないようにします。その際、大まかなアウトラインをとらえるようなシンプルなタスク（「私の夢は何ですか」など）を与えておいて、聞かせたあとに答えを確認します。その後、読まないと思われ部分の問題（リーディングタスク）にして、教科書の本文を読ませ、答えさせていきます。Q&A を 2 回するこ



TAKASHIMA
KENJI



TANIGUCHI
TOMOTAKA



FUKUSHIMA
MIKIKO



WADA
TOMOKO



NEGISHI
MASASHI

とで、徐々に理解を深めさせるイメージです。USE Readの突き詰めていくと難しいところ、たとえば、第3パラグラフのtheseはなぜtheseか、new onesはなぜthemではないのか、などは、どの辺まで理解させるか、英語科で議論しました。

次は、新語の音と意味を一致させるために音声化していきます。in conclusion, worth doingなどはイディオム化して押さえます。また、必要があれば文単位で導入していきます。それが終わると、本文を短くしたサマリーの音読をします。L5はスピーチ原稿なので、大事なところを強調して読むこと(音量、ポーズを置く場所)を自分なりの理由をしっかりと意識させながら音読させていきます。音読は ①音声化できるか、②強調して読めるか、③伝わる音読ができるか、というところにポイントを置いています。

2時間目はオーラルイントロダクションから始めます。“What is her dream?”などと聞きながら、子どもたちの答えがサマリーに近づくようにしていきます。その後、ピクチャーカードで内容確認をし、フラッシュカードで単語練習をして、もう一度音読練習をします。その際、ポーズや強調させるところ、キーセンテンスなどを考えさせ、印をつけさせて、スピーチ音読に向けての指導をしていきます。

また、このレッスンに関しては、パラグラフ構成も考えさせます。各パラグラフの役割を考え、タイトルを付けさせたり、必要に応じてチャンキングをしたり、キーセ

谷口先生の授業プラン

●2年 Lesson 5 (2時間)

- ALT, 日本人教師による「なりきりスピーチ」→Q&Aでアウトラインを確認
- 本文を黙読→タスクで細部の確認
- 新語・表現・文を音声化して意味確認
- 音読(大事なところを強調して読ませる)

- オーラルイントロダクション
- ピクチャーカードで内容確認
- フラッシュカードで単語練習
- スピーチに向けての音読練習
- パラグラフ構成を考えさせる
- 次の活動(スピーチ)への橋渡し

●3年 Lesson 6 (3時間)

- 新語の導入(絵, 別の読みもの, タスク)
- 本文を黙読→問題を解く
- 解説(難しい単語・表現の確認)
- Post-Reading(要約)
- 要約文の音読
- キング牧師の人物紹介
- 黙読(鑑賞のリーディング)

- ローザ・パークスのことをまとめさせる
- キング牧師のスピーチを聞かせる
- キング牧師のスピーチを参考に音読させる

ンテンスを見つけさせたりして、どういう構成になっているか、考えさせます。最後に次のスピーチの活動に少し触れて終わりです。

根岸 レッスンによって授業展開が違うとおっしゃいましたが、2年L5と対照的なレッスンがあればご紹介ください。

谷口 3年 L6 “I Have a Dream”は対照的です。

まず、新語を導入するところから始めます。これは絵や別の短い読みものを作ったりして覚えさせ、線つなぎのタスクなどを与えます。活動が5分を超えると生徒が飽きるの、いかに短い時間でたくさんの単語を導入できるかが勝負です。単語のチェックをしたあと、本文を最初から最後までひととおり読ませます。机間指導をして、読むのが難しいと感じている生徒には、難しい単語にルビを振った補助プリントを渡します。

読ませるときには問題を解かせるようにし、ここで大まかな意味をとらせます。その後の解説で、難しい単語は取り出して指導します。

次に、p.73のPost-Reading(要約)をさせます。大変内容の濃い文でしたが、子どもたちはほとんど理解できたので、その後この要約文の音読をさせました。

ここでいったんUSE Readから離れて、キング牧師の人となりや平易な英文で紹介します。暗殺されたこと、また暗殺前日にそれを予見するような手記が残されていたことなどを知り、生徒はショックを受けていたようでした。またインターネットでスピーチを聞かせると、生徒は再び興味をもったので、次は鑑賞のリーディングとして、もう一度USE Readを読

PROFILE



谷口友隆

神奈川県相模原市立由野台中学校教諭。英語授業研究会理事。現在、『英語教育』(大修館書店)にて「英語でニッポンを紹介しよう」を連載中。人格形成に役立つ英語教育のあり方を模索することに力を入れている。興味のあることは、「アドラー心理学・コーチング」。

ませました。また、先ほどのキング牧師の人物紹介にはローザ・パークスのことも出てきたのですが、その部分は空白にしておき、生徒たちにまとめさせて、グループでシェアさせました。

その後、キング牧師のスピーチのスク립ト（和訳付き）を見ながら音声で聞かせました。教科書で省かれているところも聞かせたあと、キング牧師の音声を参考に、スピーチのドラマティックリーディングをさせました。生徒は「先生、怒りがあるから速いんだね」「どうしてポーズをとっているのかな」などと、楽しんだりいろいろ考えたりしながら取り組んでいました。

根岸 補助プリントを使えば、スローラーナーの生徒も読めますか。

谷口 はい。英語が苦手な生徒たちには、英語ができないのではなく単語がわかっていないこと、語彙を習得すれば読めるようになることを伝えています。

デジタル教科書を使って(2年L5)

福島 私はデジタル教科書を使ってUSE Readの指導をしています。区の研究会で、USE Readは学年で段階的に語数が増えてい

ること、入試は400～600語の英文を読んで自力で答えなくてはいけないこと、読む力をつけるためにこのページがあること、などを聞いたので、それを生徒にも説明しました。その後、生徒の意識も変わってきたように思います。

2年L5の導入では、まずデジタル教科書の動画を見せたあと、新語をフラッシュカードの機能を使ってリピートさせます。単語は書けるようにならなくてもいいので、意味を頭の中に残すために見せています。教師の声でも読む、日本語→英語の順番にするなど、2～3回バージョンを変えて、頭に残るようにします。

次に本文に入ります。まず読む目的（久美は何になりたいのかを読んでみよう、など）をはっきりさせてから、ピクチャーカードを見せながら、一度音声を聞かせます。その後、教科書を開いて、黙読をさせますが、その際、生徒の読む目標になるように、2学期からストップウォッチを前に表示してWPM (words per minute) を計らせるようにしました。生徒には速く読むことが目的ではないこと、内容をきちんととることを伝えています。生徒のモチベーションも上がるし、ストップウォッチがどんどん進むので、全員がしっかり取り組んでいるように思います。

読んだあとにIn-Readingの答えをノートに書かせます。得意な生徒は文で、苦手な生徒は単語だけでもいいので、答えられたら褒めるようにしています。スローラーナーの生徒の扱いが難しいと言われますが、Q&Aの最後にパ

福島先生の授業プラン

- 2年 Lesson 5 (1～2時間)
- 関連動画を見せる
- 単語の導入 (フラッシュカード、パターンを変えて)
- ピクチャーカードを見せて音声を聞かせる
- 黙読 (WPMを計らせる)
- In-Reading (Q&A) (- Check)
- 答え合わせ・解説

ラグラフ番号が入っているので、それが助けになっているようです。また、少し難しい問題については、黒板に単語数だけ線を引くなどのヒントを書き、必要であれば見られるようにしています。

英語の得意な生徒については、Checkのところまで取り組ませます。教科書に鉛筆で線を引いたりするように指示を出します。

ほとんどの生徒が終わったところで、解説をしながら答え合わせをします。デジタル教科書は、ぱっと答えが出るので大変便利です。

ここまでの1～2時間で、集中して読ませました。私の場合は、このUSE Readからスピーチの活動にはつなげなかったのが、特に音読はさせませんでした。まずはとにかく読んで、100%でなくてもよいので理解できること、In-ReadingのQに答えられること、WPMを伸ばしていくことを目指して指導しました。

生徒はこの学び方に慣れてきたようで、英語が苦手な生徒もQに答えられるようになってきてはいるのですが、どの程度内容理解が伴っているかわからず、そこが課題です。内容が理解できたのではなく、Qの答え方がわかっただけかもしれません。

PROFILE



福島美記子

東京都板橋区立高島第三中学校教諭。平成21、22年度東京教師道場部員。生徒同士の学び合いがある授業づくりに力を入れている。また、デジタル教科書を取り入れた授業にも取り組んでいる。興味のあることは、生徒の正しい力をはかるテスト作成。



TAKASHIMA
KENJI



TANIGUCHI
TOMOTAKA



FUKUSHIMA
MIKIKO



WADA
TOMOKO



NEGISHI
MASASHI

中学校における『読み』の授業とは

L7は、すでにGETで単語や背景知識がほとんど入っており、新語も音で聞けばわかるようなもので、単語の導入をあえてせず一気に読ませます。

読ませるとき、Qを先に提示しておきます。まず1回目は1分間、2回目はわからない単語に線を引かせながら黙読させます。2回目の黙読のあと、わからなかった単語の数を聞きます。このレベルの文章で未知語が10個以上ある生徒は語彙不足であると思いますので、読めるようになるには語彙を増やすべきだと伝えます。未知語が少ない生徒には、わからない単語があっても読めるし、止まらないで読み進めることが大切なのだと言います。そして、3回目の読みでは、音声を聞かせながら、目で文を追って読ませます。

その後、In-ReadingのQ&Aをします。いきなり口頭で答えるのは難しいので、答えにあたる文に印をつけさせたあと、口頭で答えさせます。ただ、In-Reading 2(3)など、複雑な答えは板書します。

その後、フラッシュカードで単

PROFILE



高島健治

千葉県浦安市立浦安中学校教諭。英語の授業を通して思いやりの心を育てること、習熟の差があっても全員が楽しめる授業づくりに力を入れている。興味のあることは、生徒が自主的に夢中になって取り組める発音指導、音（呼び鈴や効果音）を用いたリスミカルな授業。

谷口 単語をフラッシュカードで導入する意図を教えてください。また、新語の中にはsuchなど大事な語もあると思いますが、そのケアはどうしていますか。

福島 フラッシュカードでの導入ですが、カードには本文で使われている意味が書いてあるので、それをフラッシュさせて頭に残し、読む手立てにしています。また、大事な単語については、ほかで出てきたときに辞書を引かせたりしています。単語については、そこでこだわってつまづいている生徒はあまりいないようです。入試や英検でもわからない単語は出てくるので、USE Readのページはわからない単語があっても内容を読み取ることを目標にしています。

根岸 単語に関していうと、どう導入するか、読むときにどう生徒にわからせるかなど、課題がいろいろですね。フラッシュカードは、意味が消えてしましますが、そのあたりはどうでしょうか。

福島 そうですね。確かに、意味が消えてしまうのは気になるところではあります。机間巡視をしていると、単語を聞いてくる生徒もいるし、辞書や巻末の単語の意味を見ている生徒もいるので、重ねて指導する必要性を感じています。

谷口 この本文の押さえはどこかですのでしょうか。

福島 In-ReadingのQ&Aは重要なところを聞いているので、それに答えながら確認していきます。たとえば、L6“Uluru”のQ&Aに答えるときは、Ananguを理解するために重要な本文の箇所や写真を抜き出して説明しました。

根岸 スピードを意識させる指導は、訳読とは対照的な指導法です。また、何度も読むことは大切ですね。USE Readのページの右上にリーディングのマークがあるので、何回か読むたびにそこに秒数を書かせると、だんだん速くなっているのがわかります。宿題などで取り組ませると、読めているという実感も出るかもしれません。

福島 3学期になったら、これまで学んだUSE Readを全部読み直させるとよいかもしいですね。

内容理解を促す読み方(1年L7)

高島 今年、他社版から変わりました。担当は1年生なので、担当する生徒たちは抵抗なく使っていますが、教員は大幅に違うタイプの教科書に戸惑っていることが多いように思います。GETが短く、Readが長いので、その扱いをどうするか、ということは話題になっています。

現時点(10月)では、USE Readのあるレッスンにはまだ入っていないので、USE ReadのあるL7の授業案を考えました。USE Readはまとまっている文章なので、GETとは指導の目的を変えて、長い文を速く読むコツを教えたり、内容を深く味わわせたりしたいと思っています。

まず、オーラルイントロダクションをしますが、本文に書かれている情報は話しません。話してしまうと読む前に内容がわかってしまうからです。なので、京谷選手の経歴や、以前京谷選手のチームと交流させていただいたときの実際のエピソードなどを話そうと思っています。

高島先生の授業プラン

- 1年 Lesson 7 (2時間)
- オーラルイントロダクション
- Q を与えておく
- 黙読① (1分間)
- 黙読② (わからない単語に線を引きながら)
- 黙読③ (音声を聞きながら)
- In-Reading (Q&A)
- 単語の確認 (フラッシュカード)
- 音読
-
- 主語・動詞に線を引かせる
- スラッシュを入れさせる
- 文法的な観点で説明 (Check など)
- スラッシュの区切りで訳しながら読む
- ① Picture Description /
- ② Q&A 作り

語の確認をし、本文を音読します。

以上が1時間目で、ざっと読むということを目指したいと思います。

次に2時間目は、まとまった文を読むコツを教えていきます。長文の読み方は1年生から段階的に取り入れようと思っています。

長文を読むためには、語彙の量、主語・動詞がわかること、一文が長くてもチャンクを意識できることが大切だと思うので、まず本文が書かれている別プリントを用意して、主語と動詞に線を引かせます。次に、スラッシュを入れる練習をさせますが、初めてなのでヒントを出しながら入れ方の指導をします。そして、Checkにあるような指示語の問題や grammar

hunt など、文法的なとらえ方をさせようと思っています。そのあと、スラッシュのところで区切りながら、前から意味をとらえて読んでいくことをさせます。

2時間目の最後は、①左ページの文章をある程度覚えさせて、ピクチャーカードを使って紹介させる、②生徒たちに左ページのQ&Aを作らせる、のどちらかにしようと考えています。

入試問題の量を読ませるためにはテクニックの指導も必要ですが、せっかく Read が充実した内容なので、それを味わわせたいという思いもあります。テクニック半分、内容を味わわせること半分で授業を進めていこうと思っています。

福島 疑問文でも主語・動詞に線を引かせますか。

高島 L7 では、疑問文は引かせないかもしれませんが。GET だと口語が多いので、USE Read でこういう活動をさせたいと思っています。

和田 パラグラフについての指導もしますか。

高島 1年は段落が短いので、パラグラフリーディングは2・3年になってからしようと思っています。

根岸 未知語があるまま読ませるというのは、考え方としておもしろいですね。未知語は外国語・母語を問わず存在するものなので、知らない単語があるのは当たり前

であることを知らせるのはおもしろいと思います。ただ、未知語がどの程度だとギブアップしないのか、という問題はあります。以前に羽鳥博愛先生が30語に1語という基準を提案されていましたが、それに当てはめると、L7で許容できる未知語は3語ほどになります。しかし一方で、新語として出てきている Japan, shoot などなじみがある単語でもあるので、この程度ならよいのかもしれませんが、どうでしょうか。

和田 聞けばわかるけれど、文字で見ただけではわからない単語もあるかもしれないですね。少し言ってあげればわかるようになる、ということもあると思います。

高島 そのために、読みの3回目に、音声を聞いて目で追う作業を入れてみました。

福島 フォニックスなどをきちんとやっておくと、Read などにもつながるのかなと思います。

谷口 確かに、文字の音声化は、トレーニングでできるようになるものだと思います。ただ、ある程度、自分の中でまとめられるくらいの語彙を確保できて初めて、つづりと音がつながる、というところはあります。

根岸 そうですね。ルールを導入するのは、ある程度単語を学んだあとがよいと思います。

和訳／スラッシュリーディング

谷口 根岸先生は冒頭で、中学校で和訳はあまりされてこなかった、とおっしゃいましたが、「和訳をどうしているか?」というのは、教員同士で意外によく出る話題の1つ

です。

根岸 私たちは母語を共有しているので、訳もうまく使えば効率的だと思います。問題は和訳を目的化することや全訳なのではないで

しょうか。先ほどの福島先生の授業例のように、ポイントだけ訳すようなやり方ができればよいのだと思います。

谷口 訳は生徒の理解をはかるの

に手っ取り早いときもあります。先ほど福島先生もおっしゃっていましたが、生徒たちが英語をどれだけ理解できているかをQ&Aだけで判断するのはなかなか難しいと思います。

和田 理解がはかれないのは、そのQ&Aが問題なのだと思います。理解がはかれるようなタスクづくりを教師側がすればよいのではないのでしょうか。

谷口 そうですね。ただ、一方で、文章のメッセージを理解するというだけでなく、英語を構造的に理解させたいという教師の思いもあります。

和田 GETがそういうページなのではないのでしょうか。

谷口 そうなのですが、文法自体に焦点が当たっているような文ではなく、Readのような流れの中で英語自体を理解させたいということです。

根岸 メンタリティーとして、「全部わからないといけない」と思うのと重複するところがありますね。先ほどの「Q&Aで出たところだけわかればいい」と割り切ってよいかということと関係してくるでしょう。現実の読みだと一語一句すべてわかるということはないので、そこをどうとらえるかです。

谷口 中学校の段階では、アウトプットにもつながるので、しっかりと英語を理解させたい、と思うのかもしれませんが。

根岸 USE Readは読むための素材といえど、まだ「教科書本文」としての性格を残しているということが、今日お話をうかがってわかりました。確かに、私たち

は現実生活でも、読んだ文の中から「この一文を使ってみよう」などと思うことはあります。そういうことも考慮して、長い本文のどこをとりわけケアしたらよいのか、を考える必要がありますね。

福島 その1時間の授業で完結しないといけないと思うと苦しいので、3年間でどれくらいできるようになるかというふうにと考えるとよいのだと思います。同じ単語や表現に何度も出会って、そこからなくても、2年生で気付いたり、3年生で急に書けるようになることもあります。だから、学年の終わりに最初からもう一度読ませて、もう少しハードルの高いQを与えるのもよいのかなと思いました。

根岸 そう考えるのは、リーディングを「スキル」としてとらえているからで、全部その場でわからないといけないと考えるのは、Readに出てくる英語を「知識」としてとらえているからだだと思います。

谷口 先ほど和田先生もおっしゃいましたが、GETとUSE Readの扱いの違いを、教師がどれだけ理解するかということにつきます。やはり、これだけのテキスト量があるので、「ここでできることは何か」ということを意識することが大切だと思います。

根岸 和訳の話が出ましたが、高島先生が先ほどおっしゃった、スラッシュリーディングについてはどうでしょうか。

高島 これが果たしてこれまでの訳読式とどれくらい違うのか、ということではありますが…。このやり方は、文構造や切れ目を意識

中学校における『読み』の授業とはし、前から訳していくという感覚を身につけさせるために取り入れている先生方も多いと思います。区切ったところでそのまま読んでいけば、内容は理解できるので、きれいな日本語にする必要はありません。むしろ、きれいな日本語をつくらうとすること自体難しいと思います。チャンク→訳、チャンク→訳と、リズムカルに文を訳させていくので、停滞することはありません。変な日本語かもしれませんが、前から訳していくことで全体像はつかめるのかなと思っています。

根岸 スラッシュリーディングは、直訳直解への橋渡しですよ。以前に読んだりサーチによると、スラッシュがあった状態で読ませるのは下のレベルで、上のレベルの生徒は自分でどこに入れるかを考えながら読むように移行していくのが大事だということでした。

また、不必要に細かくスラッシュを入れると、逆に時間がかかってしまうので、気をつける必要があります。さらに、全部日本語にする必要はなく、わかりにくい部分だけ日本語に直すと理解しやすく

PROFILE



和田朋子

工学院大学准教授。専門は英語教育学（言語テスト論）。ELEC 同友会英語教育学会、日本語テスト学会所属。著書に『はじめての英語論文』（すばる舎）ほか。英語の授業を通して「考える人間」を育てることに力を入れている。興味のあることは、文法の機能面を重視した文法指導。



TAKASHIMA KENJI



TANIGUCHI TOMOTAKA



FUKUSHIMA MIKIKO



WADA TOMOKO



NEGISHI MASASHI

なるかもしれません。そうやっていくと、ここから直接イメージがわくようになるのだと思いますが、練習量も必要です。

和田 私自身も授業でスラッシュ

リーディングをさせていますが、チャンクがどういう意味だったかを考えさせながら、3回くらい読ませたりします。その中で、“this is” といったら「これは」ではなく、

「何かを示している」ものだというイメージをもってくれているといいなと思います。これだけのテキストがあるので、何ができるかを考えることが大事だと思います。

音声の扱い／音読について

福島 読むときに理解しやすいようにと思って、本文を読む前に音声を聞かせているのですが、どうでしょうか。今はいろいろと試しながらやっているところです。

根岸 読みについての音声を聞かせるか聞かせないか、また、音読をさせるかさせないか、させるとすればタイミングはいつかという問題がありますね。

福島 デジタル教科書だと、ピクチャーカードと音声と一緒に流れるので、内容理解の助けにはなっているかなと思っていたのですが、初見で読んでることにはならないですね。

根岸 最初に読ませて、その次に音声を聞かせて「そういうことだったのか」と思わせるといいかもしれませんね。

福島 そうですね。そのあとにIn-Readingに進めば、生徒ももっとQ&Aに答えられるかもしれません。

谷口 音声を聞かせるかどうか、というところは、テキストの難易度とタスク内容、生徒の発達段階が関係してくると思います。2年L5は音声を聞かせたのですが、それはTryで「スピーチの工夫」を問うところがあったからです。他では聞かせないこともあります。

根岸 音読についてはどうでしょうか。音読はある程度授業の中で

定着しています。

福島 目的にもよるかもしれないですね。2年L5などでスピーチをさせたい、ということであれば音読もよいかもしいのですが、2年L7の“Good Presentation”は音読させなくてもよいかと思います。

谷口 どうしても読ませたいなら、教師がサマリーを作るのはどうでしょうか。押さえたい文が含まれているものをGETの本文くらいの量に作り替えるのも1つの方法だと思います。また、ここはどうしても音読させたいという表現が含まれている文章を5行だけ読ませる、というようなこともしています。

和田 なぜここで音読をさせるのか、教える側が目的を考えることが必要です。何を教えたのかを常に戦略的に考えていかないと、いろいろなテキスト素材を与えても全部が無駄になってしまう。音読がとても大事なレッスンもあれば、そうでないと思われるレッスンもあります。たとえば、すぐく気持ちの入ったレッスンであれば、最後に気持ちをこめて読むという活動をするので、アクティビティの総仕上げになります。

根岸 音読するかどうか、というのは文化や宗教の違いもあるかもしれません。声をそろえて教典を

唱えるような文化のあるアジア圏・イスラム圏の方が、ヨーロッパに比べてみんなでそろってやる意識が強いように思います。リーディングの考え方として、Reading for languageとReading for comprehensionがあって、前者はテキストタイプに関係なく音読などをやる、後者はテキストタイプを意識するので、相応しくないものは音読しなくてもよいと考えられます。

和田 声に出すことで、抑揚などが響きとして頭の中に残るという作用はあると思います。習慣的にそういうトレーニングをしていると、黙読しているときにもチャンクの切れ目などがわかります。逆にそれがないと、淡々と語を読むだけになってしまいます。そういう意味では、どこかの時点で音読することは大切なのだろうと思います。

高島 私は授業計画に音読を入れていたのですが、お話を聞いていて、はたして入れるべきなのか考えてしまいました。たとえば、1年L7の左ページ(京谷和幸選手の紹介)は、他者紹介につなげるなら音読をする必要性はあるかもしれない。もしつなげないのならば、音読はせずに別の活動をした方がよいですね。むやみに音読をすればいいわけではないと思いました。

また、右ページの車椅子バスケットボールのルール説明は、もし目的がないのであればわざわざ時間

をかけて音読する意味はないかもしれませんね。

福島 やはり教師が何につなげて

中学校における『読み』の授業とはいくかというところが関係してきますね。

単語をどうするか／スローラーナーへの配慮

根岸 USE Read で出てくる単語をどのように扱うか、という話題が、先ほど実践を紹介していただいたときに出てきました。単語をどのタイミングでどうやって学習させるのかというのは課題の1つでもあります。

単語については、中学校の段階で、どこまで求めるかということを考える必要があります。たとえば in conclusion のような、意味さえわかればよい語句もあれば、しっかり書けるよう求められる語句もあると思います。NEW CROWN では、Words の欄で分類して明示してはいるのですが、先生によって指導は様々かと思えます。またこれはテスト作成にも影響してくることかと思えます。

福島 この段階で全部しっかり覚えさせるのは教師も生徒も大変ではないかと思えます。太字の単語を押さえられたらよいのではないのでしょうか。

谷口 読む技術と同じく、語彙をどういうふうに着着させていくかというのは重要だと思います。放っておいてもダメだし、大量に押しつけてしまってもダメ。どう繰り返し仕組んでいくとか、語彙をどう指導していくかを考えることは大きな課題で、今までどおりに考えてはいけなと思います。受容語彙と発表語彙に分けるというのは1つのやり方だと思います。

根岸 単語の定着には何度も出てくることが望ましいと思うのですが、そういう単語ばかりではありません。もし、一度しか出てこない場合などは、先生方はどのように指導されていますか。

谷口 Read はテキストタイプによっては生徒のアウトプットのモデルになるので、そこで出てくる単語は一番定着すると思います。やはり生きた表現として、実際に使って覚える方法は効果的だと思います。

和田 私は、オーラルイントロダクション、インタラクションの中で、教師がどれだけ繰り返し使うことや使わせることを意識できるかということがポイントだと思います。その意味で、高校の「英語で英語を教える」指導にもつながります。英語で英語を教える、というのは、英語で難しいことを説明するというのではなく、学んだことを普段に生かしていくということ、つまり、外国語として英語を学んでいるハンディキャップをこれで払拭しようということなのだと思います。常に使う、何度も出す。教師の力量で、授業の中にもうまく投げ込んであげるとよいのかなと思います。

谷口 確かに、どんなオーラルイントロダクションにしようか考えるときに「この単語・文法事項は学習したから使えるな」などと考えることもあります。オーラルイン

トロダクションで既習事項を出したり、あえて途中で教師の発話を止めて生徒に続きを言わせるなど工夫することで、効果的なインプットになると思います。

単語といえば、英語が苦手な生徒は、苦手な理由として「単語がわからない」ということが一番多いです。そういった生徒をカバーするためには、生徒がどこでつまづいているかを教師が知ることが大切だと思いますね。文字が読めないのか、単語がわからないのか、ただやる気がないだけなのか。

根岸 全体的にとっても先を急ぐという傾向にありますね。本当はもっとその段階のものをたっぷり与えてあげなければいけないのに、どんどんと先へ進むことで、落ちこぼしてしまっていることがあるかもしれません。そういう意味でも、繰り返し提示したり、前の学年のものを読ませるといったことはやってよいかもしれないですね。

PROFILE



根岸 雅史

東京外国語大学教授。専門は英語教育学・言語テスト。現在、日本言語テスト学会・英語運用能力評価協会・外国語教育学会の理事、ARCLE 研究理事。著書に「コミュニケーション・テストへの挑戦」(三省堂)、「テストの作り方」(研究社出版)ほか。「笑いのある授業」に力を入れている。



TAKASHIMA
KENJI



TANIGUCHI
TOMOTAKA



FUKUSHIMA
MIKIKO



WADA
TOMOKO



NEGISHI
MASASHI

予習・復習をどうするか

高島 予習は一切させていません。特に Read は、予習をさせたら意味がないのではないかと思います。

福島 私も予習はさせません。その時間で読んで理解することが大事だからです。

和田 その分、復習をしてほしいですね。

福島 そうですね。USE Read をもう一度読む機会にできるといいですね。

根岸 復習させるとき、時間を計って黙読を何度もさせるという方法もあります。また何度か読んだあと、十円玉を本文の上にくっつけて置いて、単語を隠して読むという方法もありますね。

和田 復習させるときのポイント

は、生徒が一人でやっても教師側の意図している成果が得られるような課題を与えることです。ただ「読みなさい」だけではなく、「どういうふうを読むのか」というところまで、ワークシートなどで指示を与えておく必要があります。また、Read のあとの活動が Read とつながっているときには、その準備をさせるような課題を与えるのもよいと思います。

谷口 行間を読ませる問題とか、Try にあるような課題を与えるのもよいですね。「筆者が一番言いたいことを表す文を探してきなさい」など、違った視点での問いを与えると、もう一度黙読をするし、読解にもつながります。

根岸 家に帰って、もう一度読ま

せる仕掛けが必要、ということですね。

谷口 そうですね。また、クイズ合戦をやるから、ということで、Q&A や本文の3行を任意で選ばせて、そのうちの1語だけ変えたクイズを作らせる、という課題もあります。これなら、生徒が課題を忘れても休み時間にできます。(笑)

和田 大学の授業でも、「次の授業で出欠をとるときに気になる文を言ってもらいます」と言うと、生徒はそれぞれの目線で文を選んでくるので、生徒目線での復習になります。ただ、出欠をとる時間はかかってしまうのですが…。

谷口 中学校でも少人数授業であればできると思いますよ。

リーディングの評価

根岸 USE Read のテストはどうされていますか。

福島 1学期のテストには、Read は出しませんでした。2学期は、単語と文をいくつか抜いた要約文を出して、答えを選択肢から選ばせました。もちろん、in conclusion のような語句や新出文法を書かせたりはしません。テスト前に、USE Read の内容がわかっているといい、ということも生徒に伝えておきました。このような形式にしたのは、授業中に生徒が本当に内容を理解できていたのかわかると思ったのと、テスト勉強で Read をもう一度読ませたかったからです。

谷口 私は段階によって違うもの

にしています。まず、最初の段階の例として、2年 L5 ならば、firework artist を astronaut にするなど、キーワードだけをかえます。ここがかわると文章全体の内容は変わりますが、形式や構成は同じになるようにします。次の段階としては、テキストタイプは同じで、中身を違うものになっています。たとえば3年 L5 “Houses and Lives” は、エスキモーの家について調べて文章を作り直しました。さらに、最終段階では、構成もテキストタイプも全く違うものを出题します。L6 のテストは人物紹介、というつながりで、JFK かマザー・テレサにしようかと思っています。

そういったテストをするので、授業でレッスンに入るときには、USE Read の形式についても生徒に意識させるようにしています。また、どれだけストラテジーを使って読めるかということが重要だとも思っているので、パラグラフのキーセンテンスをテストポイントにすることもできます。できる生徒にはパラグラフの切れ目を探させるような問題を出したりもします。

根岸 平成23年に国立教育政策研究所から評価規準の作成についての参考資料が出ています。これは新しい学習指導要領に対応しているのですが、その中には「教科書とは別の同じような時間軸で構



成された物語」「教科書とは異なる物語を読むペーパーテストにおいて」「教科書とは異なる文章およびその内容について感想を書く」…などと繰り返し出ています。これは、これまで教科書で学習したことはテストに出るということが当たり前だったことから考えると、影響の大きい話です。今までのテストでは、何となく結果が出て、そこそこの点数がとれる仕組みになっていたけれど、この考え方ではそうはいきません。

この評価方法で考えなければいけないのは、「教科書と異なる」文章とはどういうものかということです。1, 2年生はある程度単語の置き換えで済むのかもしれませんが、3年生のキング牧師の文章は単語だけを置き換えるわけにはいきません。キング牧師のような文章では、ジャンルを置き換えたり、別の話にする必要があるかもしれません。しかし、離れすぎると、その教師の指導で読む能力が保証できているのかを見るのが難しくなります。

また、新たなトピックだと未習語が出てくるので、それをどうするかということもあります。

福島 このUSE Readのテストを本当に読む力を測るのが目的の

テストにするのならば、谷口先生のおっしゃるような、違う文章を読むテストも必要だと思います。

谷口 本文の内容とテストの本文をどれだけ離すかということには注意が必要です。「じゃあ、授業を聞かなくてもいい」になってしまったら困るので、どこかでテストとの接点をつくりながら、ストラテジーを共有させるようにしています。それは計画的に行わなければいけないことだと思います。

和田 評価がそういう形で行われることが伝われば、「先生は最後から2行目のこの文を訳してくれなかった!」と言う生徒はいなくなるはずですよ。訳すことではなく、読めるようになることが大切なんだという理解にもつながりますね。

根岸 評価のためのパラレルなテキストを授業で大学生に考えさせました。題材は1年のLet's Read 2の津波の話です。学生のうち、数人が、「崖が崩れてくる音がして、逃げると言って何人も救った」という話を作ってきました。しかし、それでは読まなくても結果が知りたいわかってしまいます。また、たまたま3年L7のWilliam Kamkwambaさんを題材にしたテストを作った学生がいたのですが、それだと少し離れすぎていま

中学校における『読み』の授業とは。どのくらいか、というのはなかなか難しいと思いました。

谷口 授業をしないでテストだけを作ろうとするのは難しいと思います。授業をすると、ポイントが明確になるので、テストを作るのは比較的簡単です。

根岸 なるほど。そうすると、テストで出題する文章をレッスンに入る前につくっておけば、「自分の授業で、はたして生徒たちがこの文章を読めるようになるのか」と、教師は常に自分への問いかけができるかもしれませんね。

今日は実際の授業例から、指導のポイント、評価まで、多岐にわたるお話をお聞かせいただき、ありがとうございました。(2012年10月)

～こぼれ話～

谷口 テキストタイプによって、読みやすさは変わります。難しいものは短くても時間がかかるし、簡単なものは長くてもすぐ読める。

福島 そういう意味では2年のL2は戸惑いました。

根岸 ざっと読めば済む話ではなく、ロジカルに読まないといけないテキストタイプですからね。また「カレンダーになぞらえる」ことが難しいとも聞きます。そういう場合は、Pre-Readingの活動で、たとえを使った説明の例を考えさせてもいいかもしれないですね。「〇〇は東京ドーム何倍分」とか。

和田 犬の年齢を人の年齢と比較する、などはどうでしょう？

福島 When we make a one-year calendar of its history, ... この文が理解できればいいんですよ。

SPECIAL



TAKASHIMA KENJI



TANIGUCHI TOMOTAKA



FUKUSHIMA MIKIKO



WADA TOMOKO



NEGISHI MASASHI